

主論文の要旨

**Exploration of coping styles in male patients with  
head and neck cancer: a prospective cohort study**

〔 男性頭頸部がん患者におけるコーピングスタイルの探索：  
前向きコホート研究 〕

名古屋大学大学院医学系研究科 総合医学専攻  
脳神経病態制御学講座 精神医学分野

(指導：木村 宏之 准教授)

佐藤 直弘

## 【緒言】

頭頸部がんは顔面や頸部に発生するがんである。男性に顕著な疾患で、85%以上が喫煙と飲酒の習慣を認める等、特殊な患者層であることに加え、他のがんよりうつ病有病率・自殺率共に高く精神的苦痛の大きい疾患である。近年、頭頸部がん患者のコーピングに関心が寄せられ、治療時期によりコーピングスタイルが異なる、回避的なコーピングスタイルと精神的苦痛の増加との間に有意な関係が認められる等といった報告が集積されている。がんという疾患に対するコーピングを研究するツールとして、Mental Adjustment to Cancer scale (MAC) scale がある。MAC scale を使用した研究では、女性乳がん患者のコーピングが生存率の悪化に影響を与えるといった著名な研究がある一方、MAC scale の下位尺度の妥当性には疑義があるとの指摘もあり、MAC scale の原著者のワトソンは、様々な部位のがんを含む大規模なサンプルで再解析を行い、要約尺度を提案している。前述のように、頭頸部がん患者は特殊な患者層ゆえ、特異的なコーピングスタイルを持つ可能性があり、頭頸部がん患者に Mac scale の要約尺度を適用することには疑義が生じる。加えて、頭頸部がん患者の自殺率は、女性患者に比べ男性患者で統計的に有意に高いといった報告もあることから、男性患者は疾患に対し適切なコーピングができていないことが示唆されるため、男性頭頸部がん患者を対象として MAC scale の下位尺度の心理測定学的性質について再確認の必要があるものと考えた。そこで、本研究では、男性のみの頭頸部がん患者を対象として、MAC Scale の探索的因子分析を行い、男性頭頸部がん患者に特異的なコーピングスタイルを検討すること、さらには男性頭頸部がん患者に特徴的なコーピングスタイルと精神的苦痛(不安・抑うつ)との関連について前向きな検討を行うことを目的とした。

## 【対象及び方法】

名古屋大学医学部附属病院耳鼻咽喉科病棟にて、2006年4月から2012年8月までに、頭頸部がん治療のために入院した男性患者150名を対象とした。質問紙による調査では、入院時(T0)にコーピングの評価として MAC scale、ならびに不安・抑うつの評価として Hospital anxiety and depression (HAD) scale による調査を行い、入院後3ヵ月(T1)、6ヵ月(T2)、12ヵ月(T3)のそれぞれの評価時に HAD scale による調査を行った。統計解析として、MAC scale の因子分析(一般化最小二乗法、直接オブリミン回転)を行った。その後、採択された MAC scale の下位因子と T0、T1、T2、T3 の HAD scale 得点との相関分析を行った。本研究は、名古屋大学大学院医学系研究科および医学部附属病院生命倫理委員会の承認内容に則り、文書による説明と同意を得た患者を対象として、個人情報保護に配慮して遂行した。

## 【結果】

対象患者は、20歳から82歳の男性頭頸部がん患者で、平均年齢は62歳であった。また、対象患者の飲酒と喫煙の習慣については、飲酒・喫煙習慣を中断した患者と頭頸部がん発症後も継続していた患者を併せて75%以上と高い割合を示していた。さら

に、対象患者のがんの部位は概ね均等に分散していたが、がんの進行度は第Ⅳ期の患者が 75%、治療法としては手術を用いた治療が 90%以上を占めていた。MAC scale の 40 項目に関して、因子分析を行った結果、3 つの因子が抽出され、それぞれ各因子の質問項目より、Negative Adjustment、Positive Adjustment、Abandonment と命名した。MAC scale の 3 因子と T0、T1、T2、T3 の HAD scale の下位尺度との相関分析の結果、Negative Adjustment と全ての時期の不安・抑うつとの間に正の相関、Positive Adjustment と T0 の不安・抑うつとの間に負の相関、Abandonment と T0、T3 の不安との間に正の相関、Abandonment と全ての時期の抑うつとの間に正の相関が認められた。

### 【考察】

Mac scale の因子分析の結果、3 つの下位尺度が抽出された。Negative Adjustment と Positive Adjustment は、他のがんの男女混合患者のコーピングスタイルと類似した項目から構成されていることから、Abandonment が男性頭頸部がん患者に特徴的な下位尺度であるものと考えられた。女性乳がん患者を対象とした先行研究において、Abandonment の項目と類似したコーピングスタイルが抽出されている。乳がんと頭頸部がんは共に身体的美観損傷があり、同じような精神的苦痛を経験する可能性があることから、同様のコーピングが抽出されたものと考えられた。また、先行研究から、進行期の頭頸部がん患者は、否認や行動的離脱といったコーピングスタイルを用いることがわかっており、本研究の対象患者のがんの進行度は 75%が第Ⅳ期であることから、このような特性が Abandonment といったコーピングスタイルに寄与している可能性があるものと考えられた。本研究の限界として、一つ目に探索的な研究ではあるものの統計的な検討を充分に行うにはサンプルサイズが小さいこと、二つ目に対象患者の脱落率が各評価時点で 30%と非常に高いことからバイアスが生じている可能性があること、三つ目に対象患者は名古屋大学医学部附属病院耳鼻咽喉科に入院し進行がんの外科的治療を受けた患者が大半であったため、本研究の結果を全ての頭頸部がん患者に一般化できないことが挙げられる。

### 【結語】

本研究は、男性頭頸部がん患者の心理的苦痛と関連する Abandonment、即ち、「放棄」或いは「投げやり」という特異的なコーピングスタイルを明らかにした。「投げやり」にもなりがちな男性頭頸部がん患者の心情を理解することで、当該患者に提供されるより良い心理的支援につながり得ると考えられた。